

No. 76 2017 年

日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<http://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

—彫刻の「存在」のあり方を求めて—



第47回日本彫刻会展覧会「彫刻研究会」の様子

第四十七回 日本彫刻会展覧会を終えて

日本彫刻会理事長 神戸峰男

国立西洋美術館の世界遺産登録を受け、益々国際色豊かに変貌し賑わう上野の杜。その中心に位置する東京都美術館を舞台とし「第47回日彫展」は無事会期を終えました。前回の第46回展に引き続き、今回も作品の陳列に大きな工夫を加えました。作品（作者）と鑑賞される方々との距離を縮める試みです。効果はいかがだったでしょうか。ご教示賜われれば幸いに存じます。

日本の彫刻は長い歴史の中、大陸からの影響を受けながらも列島の風土に守られ、独自の成長を遂げて参りました。しかし近年、急激なグローバルリズムが進み、彫刻の姿も価値観も、大きな変化の時代を迎えました。作家の志向は重厚なモニュメンタリズムから、繊細な心象の発露まで幅広く多様化しています。

変わるもの・変えなければいけないもの、変わらないもの・変えてはいけないもの、日彫展はそれらが混沌とする坩堝です。自身の理念・彫刻観をどこに定めるのか、作家各々の姿勢が問われています。この争競・相乗と内省こそが、日本彫刻会の存在の意義であると思っております。

第48回展に向けての会員各位のさらなる修養と、作品の熟成に期待を込めるものがあります。

本会開催に際し、お力添えをいただきました各委員をはじめ、関係各位に厚く御礼を申し上げます、第47回日本彫刻会展覧会終了の御挨拶いたします。



平成29年度日本彫刻会総会

第88回通常総会報告

平成29年1月28日(土)午後3時から日展会館において第88回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 190名(内委任状154名)
定款17条の定めるところにより総会成立

議事

- 第一号議案 平成28年度 事業報告承認の件
- 第二号議案 平成28年度 決算報告承認の件・監査報告
- 第三号議案 第47回日彫展開催に関する件
- 第四号議案 会員状況承認の件
- 第五号議案 特別賞規程一部変更の件

全議案とも異議なく承認されました。

報告

- 一 平成29年度 事業計画の報告
- 二 平成29年度 予算の報告
- 三 新運営委員および新無審査会員の報告
- 四 第47回日彫展審査員の報告
- 五 第47回日彫展会友推挙選考委員の報告
- 六 日本彫刻会選抜展(三越展)準備状況の報告
- 七 その他の報告

第47回日本彫刻会展覧会報告

公益社団法人 日本彫刻会は凡そ70年の歴史を持つ彫刻研究団体です。本会は、彫刻のみの展覧会としての独自性の発揮と公益に資するという大きな目標のもと、会員一同自己研鑽を日々重ねております。

展覧会では彫刻作品を展示するほかに「彫刻研究会」「彫刻鑑賞解説会」など、彫刻を通して一般鑑賞者の方と繋がりをもつ機会を大切にしています。また、日彫友の会における「彫刻に触れる鑑賞支援活動」では視覚に障がいのある方にも彫刻を深く鑑賞していただけるような公益性を持った活動も積極的に行っています。

そのほか、地方日彫展・各種選抜展なども開催しています。

本年も上野の東京都美術館を会場とし、第47回日彫展を開催いたしました。詳細は以下の通りです。

①会期 平成29年4月19日(水)

5月2日(火)

②会場

東京都美術館

ギャラリーA・B・C

(東京都台東区上野公園8-36)

③陳列点数

296点

(内訳)

正会員 231点

会友 36点

遺作 1点

無鑑査(一般応募) 1点

鑑査(一般応募) 27点

④審査員

審査員長 神戸峰男

雨宮敬子 橋本堅太郎 池川直

笹山幸徳 銭亀賢治 田丸稔

辻畑隆子 堤直美 中辻伸

上田ふみ 小西徳泉 白石恵理

鈴木徹男 宮坂慎司

(以上15名)

西望賞審査員

守屋正彦 筑波大学教授 博士

⑤会友推挙選考委員 (芸術学)

笹山幸徳 池川直 銭亀賢治

田丸稔

(以上4名)

⑥受賞者

西望賞 池川直

日彫賞 桑原秀栄 田村さつき 橋本拓也

優秀賞 上松真弥 小橋暁子 武本大志

山本将之 加藤真浩

新人賞 石神有紗 浮森夕菜 田原迫華

服部真知 馬場正邦

⑦会友推挙・正会員推挙

会友推挙

浮森夕菜 岡崎都子 木村奈穂美

高木廣一 常石孝子 前田桂子

三瓶由美恵 (以上7名)

正会員推挙

市原敏充 南部武司 橋本拓也
村上宙矢 馬場正邦

(以上5名)

⑨彫刻研究会

4月22日(土)
受賞作品を中心とした作品批評、研究会を
実施しました。

参加者 約150名

⑩彫刻鑑賞解説会(ギャラリートーク)

期間中毎日(4月22日、最終日を除く)

通算参加者約 164名

⑪彫刻に触れる鑑賞支援活動

a、視覚に障がいがある方のタッチツアー
希望者の申し込みにより実施しました。

通算参加者約11名(うち付添6名)

b、盲学校鑑賞教室

4月21日(金)

東京都立

葛飾盲学校

中学生2名

教員2名

4月28日(金)

東京都立

久我山青光学園

小学生23名

教員14名

⑫表彰式及びオープニングパーティー

4月22日(土)午後5時から

会場 東天紅 上野本店(鳳凰の間)

(東京都台東区池之端1-4-1)

参加者 205名(うち招待者24名)



会場風景 ギャラリーC



会場風景 ギャラリーB



表彰式の様子



守屋正彦先生による
「西望賞」審査所感

70歳以上、子供 474名
日本美術家連盟、他 68名

付添者 97名

182名

招待状 5,466名

招待券 732名

出品者 1,098名

身体障がい者手帳をお持ちの方

182名

付添者 97名

182名

182名

182名

182名

182名

182名

182名

182名

182名

◆受賞者の声



① 西望賞 池川直 「ワルシャワ 2015 秋 I」

2015年秋、ワルシャワで開かれた五年に一度のピアノコンクール、「シヨパンコンクール」を聴くために訪れた。ワルシャワは第二次世界大戦において占領していたドイツ軍に対して市民が一齐に蜂起した町である。かつて「東欧のパリ」とも言われた町は無惨にも廢墟と化し、今は近代的な建物が多く見られる。市内にある蜂起博物館での展示は当時を物語っていた。それらの資料と百年前に生きたシヨパンのややもの哀しいメロデーは、私の胸をしめつけた。その後、一通の葉書が届いた。私の妻のピアノの教え子である高校生がワルシャワ中心にあるワジンキ公園のシヨパン像の前に置かれているピアノを弾いた感動を伝えたものであった。平和な光景と町の過去の歴史を一つの像としてつくってみた。



② 日彫賞 桑原秀栄 「つつか、きつと」

今は陽の差さない状況にいても、いつか陽の差す未来があることを信じて頑張る人を表現意図として制作した。今回の作品は少々生々しくなってしまったかもしれませんが、彫刻にあまりなじみのない方にも入りやすくなるよう、ストレートな表現を意識しました。



③ 日彫賞 田村さつき 「実」

この度、名誉ある日彫賞をいただきましたこと、嬉しさと同時に感謝の気持ちでいっぱいです。この作品は、老夫婦の歩んできた歴史や夫婦の距離感を、まとまりのある形態で表現しようと試みたものの、制作は試行錯誤の連続で、まだまだ追い求める理想からは遠いのですが、これからは勉強し続けてまいりたいと思います。



④ 日彫賞 橋本拓也 「彩り・高鳴り・輝く」

人の心とは、ということを表現してみました。心の中が彩りはじめると、心の中でオモイ、が高鳴りはじめ、すると、人は心の中から輝きはじめるのではないだろうか。男性でも女性でも、今回は女性の方がつたりやすいのだろうと思ひ、女性に挑んでみました。いろいろなものがついているのは、見ていただく方々に向けての情報です。なんでこれがついているのだろう、なぜこうなのだろう、そこに僕がいれば、その方々との会話が生まれることになり、いろいろなことを話すわけで、そのことは、僕にとってもその方々にとっても、これからの、彫刻のあり方ということを考える上でとても重要なことなのではないかと思ひ、このようなカタチになりました。

⑤



⑤ 優秀賞 上松真弥 「浮雲く夢の中へ」

作品制作の際、自然現象や空想の世界から着想を得ることが多くあります。本作品は眠りにつく時、現実の世界から離れ、浮かび上がるように夢の世界に入っていく感覚を表現しようとなりました。人物と雲が合わさったり溶け合うように造形することで、空に浮かぶような浮遊感を持たせられないかと試行錯誤しながら制作いたしました。

⑥



⑥ 優秀賞 小橋暁子 「逃げだす王様」

今作品では、子どもとニワトリのやりとりの一コマを表しました。相手がいることで生じる想定外のこと、戸惑い、そこから生まれる面白さ等、作品から物語を読むような表現を目指しました。彫刻の魅力の一つである、色々な角度から鑑賞できること、制作材料として用いている粘土の素材としての面白さも合わせ、具象表現の可能性をこれからも追究していきたいと思っています。

⑦



⑦ 優秀賞 武本大志 「夜叉丸」

作品の形態は高野山金剛峰寺の執金剛神立像を参考にして制作しました。「夜叉丸」は昨年出品した「滝夜叉姫」の従者の一人であり、他の従者の「蜘蛛丸」との連作になっています。素材は乾漆で脱乾漆技法により制作しました。目は黒目のみをガラスで造りました。色は漆を十回程重ね塗りしております。

⑧



⑧ 優秀賞 山本将之 「これから」

私はこれまで、本作のような「細身の着衣男性像」を複数体制作しており、自身の作品において、このモチーフの作品がシリーズになりつつあります。本作は私自身の心情を含む、若者特有の悩みや不安を抱える現代人の姿を表わそうと試みました。不安定な足場に立ちながらも、重心を安定させ、その目線は先を見据えています。主題に対してまだまだ造形が追いついておりませんが、「水滴穿石」を胸に、少しずつ彫刻表現の深化を図れるよう、今後努力を重ねてまいります。

⑨



⑨ 優秀賞 加藤真浩 「翔」

昨年度は私にとって、大きな節目となる年でした。「翔」という作品名の通り、高く翔びたいという思いをこめ制作しました。また、自分自身で翔ばなければならぬ、更にステップアップしていかなければならないという思いもあります。今まで積み重ねてきた事をいかしつつ、新たな挑戦もしていきたいと思っています。自分の中で新たなスタートである今回の日彫展において、賞をいただけたことを大変光榮に思います。良いスタートをきれたので、このまま走り続けていきたいと思っています。

⑩



⑩ 新人賞 石神有紗 「春」

良いことがあれば悪いこともある。そんな浮き沈みを繰り返す日々を過ごしています。それがまるで春の陽気のように思いました。この日々を愛おしく想う気持ちを作品に込めました。また、制作過程では、2体が対比になるよう、お互に関係性を持たせられるよう心掛けました。今後も、自分の想いをより表現し、伝えられるよう努力を重ねていきたいと思っています。

⑪



⑪ 新人賞 浮森夕菜 「蕾」

彫塑をはじめて三年、いまだ手探りの日々の中で、思いがけずこのような賞を賜り、大変身の引き締まる思いでございます。この作品は大学を卒業して初めて制作した全身像です。未熟な点多々ありますが、この度いただきました賞を励みにより良い、奥行きのある作品がつけられるよう、一つ一つ丁寧に積み重ねながら歩んでいきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

⑫



⑫ 新人賞 田原迫華 「Rのetude」

友人の娘、Rさんをモデルに制作しました。りんごのような頬、上を向いた鼻、大人の女性にはない、10歳ならではの弾むような可愛らしさを作りたいと思いました。しかし、10歳という年齢の人を作るのははじめてで、まったく新たな構成を学ばなければと感じ、「etude (習作)」とつけました。

⑬



⑬ 新人賞 馬場正邦 「風に吹かれて」

私のアトリエは、昨年起きた熊本地震の震源地から有明海を挟んで直線距離にして約50キロの所にあります。前震そして翌日夜中の本震、今までに経験したことのない突然の揺れ、身近に起きた大震災に改めて何気ない日常のありがたさに気づかされました。制作は、地震から半年ほど経った頃から取りかかりました。ただ震災を嘆くだけでなく前を向き諦めず復旧・復興に懸命に尽力されている被災者の方々の姿に心が動かされました。ちょうどその頃、ノーベル文学賞受賞で話題となったボブ・ディランの『風に吹かれて』。

歌詞の解釈はいろいろ議論されていますが、私は、地震で被害を受けた熊本、阿蘇の雄大な自然が思い浮かび一日も早い復旧・復興を願って作品名を「風に吹かれて」としました。また、技術的には、具象彫刻としての確かなモデリングはもちろんですが、最近では、粘土の可塑性を活かした表面処理のおもしろさを探りながら制作に取り組んでいます。

⑭



⑭ 新人賞 服部真知 「そっぽ」

本作品は大学での授業で制作したものです。約4ヶ月間、毎日モデルを見て制作しました。長い時間をかけて一つの作品に取り組むことで、自分の課題や塑像の難しさ、楽しさに気付くことができます。量と量の繋がりを意識し、伸びやかに充実した作品にすることを心がけました。

◆彫刻研究会

本会は、彫刻を通して一般鑑賞者の方と繋がりを持つ機会を大切にしており、その核となる企画として「彫刻研究会」を開いています。本企画は、審査員の先生が受賞作を批評するもので、西望賞より順に、日彫賞三点、優秀賞五点、新人賞五点、計十四点の受賞作を対象に行われます。第47回日彫展の「彫刻研究会」は4月22日（土）午後1時より開催されました。

開会に際しまして、審査員長を務められた神戸峰男理事長より「今回展は、残念なことに若干、出品点数が減りました。しかし、この会場に陳列された作品群を観ますと、それぞれの制作環境の中で、日々、制作に励んでいる作家達のエネルギーの集結といった観もあります。私はこれまで、展覧会に携わる機会が多くありましたが、問題点がある様にも思えますが、明日の日彫展は期待が持てると思ってよいと思います。本日は、遠方からも受賞者と審査員が集まりました。受賞者の方には制作の意図を、審査員の先生方には、単に褒めることなく辛口の批評をお願いしますので、どうぞご期待下さい」とのご挨拶を頂き、総勢150名が参加する研究会が始まりました。

批評会は、森矢真人、武本大志企画委員の司会の元、展覧会会場である東京都美術館のギャラリーA、Bに陳列した受賞作を一般の方々と一緒に観ていく形で行われました。それぞれの受賞作の前では、受賞者と審査員の先生が向かい合う

形でお話をされ、審査員の先生方からは、理事長が示された通り辛口の批評が発せられ、量の均衡、全体の動勢など、彫刻の造形要素に及んで批評がされました。

また審査をされた先生の批評は、受賞者の制作意図を聞いたうえで「私ならこうする」と具體的なアドバイスに及ぶこともあり、ある審査員の先生は、受賞された若手の作家がアトリエといえる様な広い場所で制作が出来ていないことに触れられ「私も、現在アトリエといえるような場所で制作をしていないが、互いに頑張っていきましょう」と、声をかけられる場面もありました。

およそ1時間半に渡って一般の方々と受賞作を鑑賞してまいりましたが、受賞者が語る制作の意図と審査員の先生による様々な批評を聞くことができ、それぞれが次作を造るにあたって示

唆に富んだ研究会だったのではないのでしょうか。閉会の際には、宮瀬富之委員長より「皆のためになるお話が多く出ました。今後ますます伸びていくことを期待しています。」と閉会の辞を頂き、研究会後に感想を伺ったある先生からは「日彫会も年々、作品がバラエティに富み多様化してきているが、審査員の先生方の批評が具體的で有意義な研究会だった」といった感想が挙げられたことが、深く印象に残っています。

◆ギャラリートーク

おなじみとなりました出品作家によるギャラリートークですが、第47回展會期中、多くの鑑賞者の方々に、作家の観点から様々なお話をし、彫刻作品に親しんで頂きました。

會期中、毎回20名前後の方々にご参加頂き、担当の本會会員と会場を巡りながら、作家ならではの制作秘話や素材、技法についての説明に熱心に耳を傾けておられました。参加された方々からは「作者の意図や思いを、どのようにして形にするのか。」「制作の前に題名が決まるのか、それとも後なのか。」といった質問も出て、さらに奥深いトークが展開される場面が多くあったようです。

今回も、作家と鑑賞者が互いに語り合いながら、距離を縮めることができた有意義なギャラリートークとなりました。



批評会を中心とした「彫刻研究会」の様子



ギャラリートーク風景

◇日彫友の会の活動

盲学校鑑賞教室・タッチツアー

すっかり日本彫刻会の展覧会企画として根付いた盲学校鑑賞教室とタッチツアー。第47回においても、日彫友の会と鑑賞支援部を中心として、両企画は行われました。

盲学校鑑賞教室には、今年は葛飾盲学校と久我山青光学園の2校が参加し、引率者を含めて約40名の参加がありました。

鑑賞は少人数のグループに分かれて会場を回る形で、それぞれに引率者と作家がつき、対話しながら進められました。「硬い」「冷たい」「ツルツルしている」といった触覚を楽しむ生徒もいれば、「木の匂いがする」と嗅覚の変化も捉えたり、会場での音の反響から大きな空間に展示がされていることに驚いている生徒もいました。また、じっくりと触れて鑑賞するからこそ感じられることもあり、《実》という作品では、口角の表現から「優しそうに笑っている」と感受する言葉も聞こえてきました。一時間ほどの時間ではありましたが、気に入った作品を二度三度みる生徒もいたり、それぞれが自分のペースで楽しむ和やかな鑑賞会となりました。

鑑賞の後はアートスタディールームに戻り、楽しみの昼食をとり、まとめの時間となりました。お土産の陶の箸置きは例年通り大好評でした。

今年も久我山青光学園の鑑賞教室では、福祉系大学の学生がゼミ活動の学びの一環で生徒た

ちとともに鑑賞を行いました。支援に関する経験はあるものの、彫刻鑑賞の経験は多くない生徒たちは、生徒と共に鑑賞を楽しむ中で、触れることで得られた気づきもあつたようです。「ボランティアとしてではなく、対話しながらの触れる彫刻鑑賞を楽しむことができ、充実した時間となりました」と語ってくれました。

毎年鑑賞教室に参加をしている筑波大学附属視覚特別支援学校は、本年度はカリキュラム変更の都合上お休みとなりましたが、次回展では鑑賞教室参加者の増加が予想されます。日彫友の会と鑑賞支援部が中心となつて行われている企画ではありますが、共に鑑賞会を楽しみたい会員・会友の皆様には是非ともお声を上げていただければと思います。手引きや支援の経験はあるに越したことはないですが、作家が作り手の視点で彫刻を語る言葉が、盲学校鑑賞教室やタッチツアーという企画の軸となるものです。



鑑賞教室の様子

(会員 宮坂慎司)

第47回日彫東海展

会期 平成29年5月16日(火)

5月21日(日)

会場 愛知芸術文化センター

愛知県美術館ギャラリー8階

陳列点数 108点(内巡回作品69点)

入場者数 1,927名

彫刻研究会 参加者 約70名

触れてみる彫刻鑑賞教室 参加者15名

(うち付添5名、晴眼者5名)

中日賞 「凝望」 柴田 茜

愛知県知事賞 「風をあつめて」 高野 眞吾

東海テレビ賞 「想」 中川 鈴子

ゴールデンウィークも終わり、過ぎしやすしい気候が続く五月中旬、第47回日彫東海展が愛知県美術館ギャラリー8階にて開催されました。

開催初日の「彫刻研究会」では、前半を遠方各地(九州、大阪、富山、東京)からご出席頂いた巡回作家の先生方に、一人ずつ作品に込める思い、エピソード、制作のやり方等、興味深い話を語って頂き、後半を地元作家が各々自由に、諸先生方に自分の作品へのアドバイスを求めたり、材質や技法の情報や、意見交換の時間として、今までとは一味違った楽しい勉強会となりました。

恒例となりました「触れて観る彫刻展」では新聞を見て来場された方も、会場で初めて知って遠慮がちに触ってみる方も、皆さん嬉しそう

に感激し、満足している様子でした。

またキャプション上に材質の表示がある事によって、多くの鑑賞者が彫刻への関心を高め、作品の解説を行う我々出品者への質問も増え、少しずつではありますが、年々彫刻がより親しみ深いものへととなりつつある手応えを感じています。

東海地方での「タッチツアー」の参加は残念ながら、近年盲学校等は全くありません。かわって毎年この日を楽しみに期待し参加して下さるボランティアの会のファンが出来ました。この会の世話役の方に助けられ、第47回展のタッチツアー鑑賞会も大いに盛り上がりました。視覚障がい者と介添え者、晴眼者、世話役からなる



巡回作家の解説



批評を求める



タッチツアー鑑賞会（作者による解説）

第47回日彫北陸展

会期 平成29年6月28日（火）

7月2日（日）

会場 石川県立美術館（石川県金沢市出羽町2-1）

陳列点数 91点（内巡回作品69点）

入場者数 1,157名

北陸日彫会賞 「re:rebirth」

横山丈樹

北國新聞社長賞 「SAWAKA」 石田陽介

日彫北陸展は会期前日の6月27日に神戸峰男理事長にお越しいただき、石川県・金沢市の代表、金沢美術工芸大学学長、石川県立美術館長、各報道機関代表など列席のもとに開場式を執り行いました。

テープカットに続いて村井良樹会員の司会進行で来賓も交えギャラリートークを行いました。まず理事長が自作について語られ、謙虚なお言葉の数々に参加会員も制作に向かう姿勢や心構えを新たにしたいと思えます。時間の都合もあり、受賞者と数名のトークとなりましたが、制作のねらいや表現の工夫が感じ取られ有意義な



ギャラリートーク風景

時間となりました。

7月1日には日彫北陸展で恒例となりましたワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」を開催しました。本年も37名の親子が参加して頂きにぎやかな会となりました。

子どもにはアルミの針金を芯棒にして軽量樹脂粘土で自分や家族の姿、動物や怪獣など自由に作ってもらいました。幼児から中学生まで年齢に応じた多彩な作品ができました。



親子彫刻ワークショップ「家族で作ろう。みんなの笑顔」の様子

一方、保護者の方にはスタイロホームを芯材にして子どもの笑顔にチャレンジしてもらいました。経験の少ない方には少しハードルが高いですが、日彫会員がポイントを教えたり、少し手を加えると見る見るうちに作品が変化し、我が子に似てくると感動の声をあげておられました。

以下、アンケートの回答から。

- ・子どもが集中して楽しそうに作っていたのを見てうれしく、おどろいた。頭の形、立体を制作する難しさがわかった。(40代・女性)
- ・思ったとおり、難しいが良い時間。いろいろ教えていただいたのは嬉しい。(40代・男性)
- ・前回も参加しましたが子供の成長を少し感じられて良かったです。子供達も先生にほめられて嬉しそうでした。(30代・女性)
- ・顔を作るのが思ったよりむずかしかったのですが、初めの肉付けを先生に教えてもらったから顔らしくなりました。(40代・女性)
- ・顔の特徴をとらえる点が大変でした。形が出来上がっていく過程が楽しかった。(40代・女性)
- ・子供と一緒に、親も夢中になって取り組んで、楽しい時間を過ごすことができました。また是非参加させていただきたいと思います。

(母親の方)

嬉しい言葉があふれ、会員も大変励みになりました。今後も少しでも彫刻の魅力を社会に発信できればと考えています。

(北陸日彫会石川事務局)

◇2017年日本彫刻会選抜展 —掌中の美—

平成29年6月21日(水)から27日(火)まで日本橋三越本店本館6階特選美術画廊において2017年日本彫刻会選抜展が開催されました。『掌中の美』と題して65名の会員によるブロンズ、木彫、テラコッタ、乾漆、陶など様々な素材による小作品が展示され、会期半ばの24日(土)には午後3時よりギャラリートークが行われました。

本展での大作とは違う身近に感じる小品ならではの発想の自由さ、面白さを味わいながら鑑賞して欲しいと言う神戸峰男理事長の挨拶の後、ご自身の作品解説に始まり、次々に指名しながら12名の作家がリレー形式で自分の作品に対する想いや制作方法、或いは苦労話などを語りました。

会場には作家を含む60名あまりが所狭しと熱心に聞き入っていました。終了後も各作家に細かな質問をしたり説明を求めたり和気あいあいとした雰囲気と充実感に会場が包まれました。来場された方には初めて解説を聞き彫刻には馴染みがなかったが、分かりやすい解説に興味をわき次回もぜひ参加したいという方や、彫刻通らしく作品の動勢や構成について鋭く質問をする方もいました。

最後に神戸理事長が日本彫刻会の歴史、選抜展のいきさつについて語られ、真剣な作家の制作態度の大切さ、そして努力している作家と作

品を通じて是非ふれあいを持ってほしいと言う言葉を最後に、45分に渡るギャラリートークを終了しました。初日から買い物ついでや美術ファンの方が訪れ、地方の会員の方々にも来場者の質問に答えたり作品の解説をしながら当番にあたって頂き、無事盛況の内に閉幕いたしました。



ギャラリートーク風景

出品作家 (65名)	中村晋也	神戶峰男	雨宮敬子	橋本堅太郎
川崎普照	蛭田二郎	能島征二	山本眞輔	
宮瀬富之	圓鍔元規	横山豊介	親松英治	
池川直	石黒光二	上田久利	江里敏明	
小野啓亘	柏原花子	勝野眞言	亀谷政代司	
川崎義昭	九後 稔	楠元香代子	工藤 潔	
寒河江淳二	櫻井真理	佐藤敬助	柴田良貴	
清家 悟	田中厚好	谷口淳一	田丸 稔	
辻畑隆子	堤 直美	寺山三佳	中原篤徳	
中村優子	西村祐一	早川高師	一鉄田徹	
堀龍太郎	堀内秀雄	榎野仁一	間島博徳	
松田裕康	山崎茂樹	山下 清	山田朝彦	
吉居寛子	吉岡 徹	上田ふみ	小関良太	
河村佳則	小宮山美貴	鈴木紹陶武	高野眞吾	
廣川政和	堀内有子	前芝武史	南川憲生	
宮坂慎司	森矢真人	安田陽子	武本大志	
長谷川倫子				

アトリエ訪問Ⅰ

◇前芝武史会員のアトリエ訪問

瀬戸内海から北へ約三十キロ、兵庫県加東市の兵庫教育大学、毎年多くの教員を輩出するこの大学で、会員の前芝武史さんは教鞭をとっています。

前芝さんの担当する主な授業は、図画工作や美術を教えるために必要な事柄についての講義や実習、彫塑領域の専門性を高めるための制作実習や論文指導です。石膏像の模刻や、モデルを使った人体具象彫刻などの一般的な授業だけでなく、一風変わった授業も展開しています。都市構想などのデザイン領域と彫塑領域を架橋する授業として、お盆の上に砂をひき、その上に積み木を並べたり積んだりする授業。基礎的な塊の組み立てを学ぶために、手や足を団子状の集合体として捉え、素描や塑造で表す授業。自然の構造と美について理解するために、骨格標本に直接粘土の塊を置いていく授業。どの授業も、塊の形状、寸法、位置、方向といった造



授業の一例

形原理に根差しており、彫刻を学問として研究しようとする思いが伺えます。

平日は授業と、制作や論文の個別指導、学内の委員としての仕事、研究論文の執筆などをこなし、夜九時あたりから明け方にかけてが自身の彫刻制作の主な時間帯だそうです。場所は、勤務校の彫刻実習室の一角です。

彫刻実習室の床は板敷きで、中央にモデル台が置かれ、左右には磨りガラスの大きな窓があり自然光が入っています。壁の木製の棚には、棕櫚縄や石膏、グラインダーなど、制作や型どりで使う材料や工具、学生たちの個人の荷物が置かれています。粘土は、床下式の粘土槽にあり、傍らには土練機があります。その他、授業作品が整頓されたワゴン、胸像用や等身用の制作台、骨格標本などは壁際に寄せられ、部屋の中央あたりには共用の制作スペースが十分に確保されていました。



兵庫教育大学の彫刻実習室

職場と制作場が同じなので、平日の仕事終わりでも制作ができる利点がある反面、彫刻実習室は学生たちも使うので、学生に見られたくない状態の作品も見られてしまうそうです。やはり上手くいく時も上手くいかない時もあり、それらを全部見られてしまうと云います。ですが、見られていることに気負うことなく、ありのままを心がけていて、何かしらが学生にとって参考になればと思い共に制作しているそうです。

取材の最後に前芝さんは、この制作場は自身の所有のものではないので、いつかは自身のアトリエを構えたいと夢を語ってくださいました。



制作中の様子



作品置き場

アトリエ訪問Ⅱ

◆ 梶川俊一郎会員のアトリエ訪問

日本の伝統的な建物を守る瓦。この瓦において、日本三大瓦として有名なのが、兵庫県の淡路瓦、鳥根県の石州瓦、愛知県の三州瓦です。特に三州瓦は、日本最大の生産量を誇ります。

三州瓦の三州とは、三河地方のことを指し、現在の愛知県東半部にあたります。皆さんご存知の通り東海地域は、良質な粘土鉱物などが豊富に存在していたことから、瀬戸や多治見の陶磁器、常滑の土管など、古くから窯業が盛んであり、三州瓦もこの文化の一翼を担っています。

会員の梶川俊一郎さんは、三州瓦の地、愛知県碧南市で鬼師を生業としています。鬼師とは、厄除けや装飾として屋根に設置される鬼瓦をつくる職人のことです。



鬼瓦の造形場の様子

父が鬼師であったため、物心ついた時から粘土で遊び、小学生の頃からは型に粘土を込めたり、簡単な仕上げをしたりと、家業を手伝っていたそうです。中学生の時、こたつで転寝していた梶川さんの脇で、父が母に「こいつ（俊一郎）と、いつか一緒に仕事をするのが夢だ」と言っているのを耳にして、鬼師を継ぐことを決意しました。今は、二代目として活躍しつつ、初代である父とともに鬼瓦をつくっています。

さて、鬼瓦の造形場から車で五分ほど離れた場所に、鬼瓦を焼成する窯と事務所の入った建物があり、その二階部分が梶川さんのアトリエです。アトリエは二部屋で、作品の保管部屋と、彫刻の制作部屋です。

作品の保管部屋の壁には、物を出し入れしやすい棚があり、小品や中品が並べられています。等身大以上の大作は、棚の前に置いてあります。その他、鬼瓦をつくるための型紙が壁に掛けられていたり、彫刻制作で使う塗料や道具が棚に整理されていたりします。



作品（上）と鬼瓦の型紙（下）

彫刻の制作部屋に入ると、まず目につくのが、天井の高さです。屋根裏との境の天井がなく、その分の空間が足されているため、室内が広く感じられます。大きな天窓も印象的で、明るさと開放感があります。床材は塗床で、石膏や粘土の汚れは掃除しやすいそうです。壁際には、棚や作業机、水場があり、中央にモデル台と制作台が置いてあります。彫刻制作で使う粘土は必要量に応じて、鬼瓦で用いている粘土を運び入れるそうです。やや難点としては、アトリエが二階であるため、粘土や石膏、できあがった作品を、階段で上げ下げしなくてはならない点は大変だということです。

アトリエを見渡すと、壁には制作のための資料写真やデッサンが貼られ、傍らには油土のマーケットがある、そういった部屋の様子から、彫刻に対する姿勢が垣間見えました。



天窓（上）と
制作中の様子（下）



彫刻の制作部屋

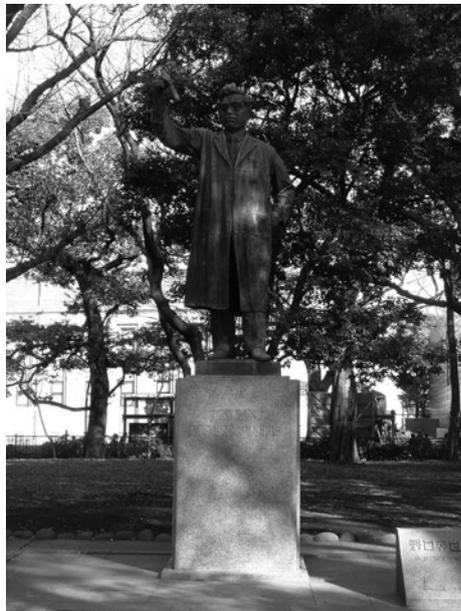
東京彫刻散歩Ⅹ

《野口英世像》

ブロンズ 一九五一

吉田 三郎（二八八九〜一九六二）

設置場所 東京都台東区上野公園八番地



H. 300cm（台座を除く） ブロンズ

東京彫刻散歩も今回で節目の十回を迎えました。これまで東京都内に設置されている彫刻作品を採りあげてまいりましたが、地方を拠点とされる会員・会友の方にとっては、足を運びづらい場所にある作品もあったかと思えます。そこで、前回の《みどりのリズム》に続いて、上野公園に設置されている彫刻を今回も採りあげてみたいと思います。上野駅を出て西洋美術館を横目に東京都美術館の方へ向かいますと、ユニークなデザインのある交差点へ出ます。そのまま直進すると上野動物園や東京都美術館の方へ行きますが、噴水のある方向へ右に曲がると、左右の端に林道が設けられており、右側（国立科学博物館側）の林道を通る中に、今回紹介する《野口英世像》が設置されています。

この作品は、野口英世（一八七六〜一九二八）の死後二十周年にあたる昭和二十二年頃に、野口の郷里にあたる福島県猫苗代文化連盟が中心となって計画し国会で採り上げられて建立が決まったもので、制作は多摩美術大学に依頼され、同校の教授として勤めていた吉田三郎（二八八九〜一九六二）が中心となって制作しました（図1、図2）。当時としては「戦後最大の銅像」として話題になり、全国の学会関係者や、児童・生徒たちから募金を集うなど大規模な建立計画が営まれました。

作者の吉田三郎は、石川県金沢市の生まれで、日本における彫刻界の草創期より活躍し、文展、帝展、戦後の日展と出品を重ね、斯界の重鎮的な存在として活躍しました。昭和三十年には日



図2 粘土荒付け

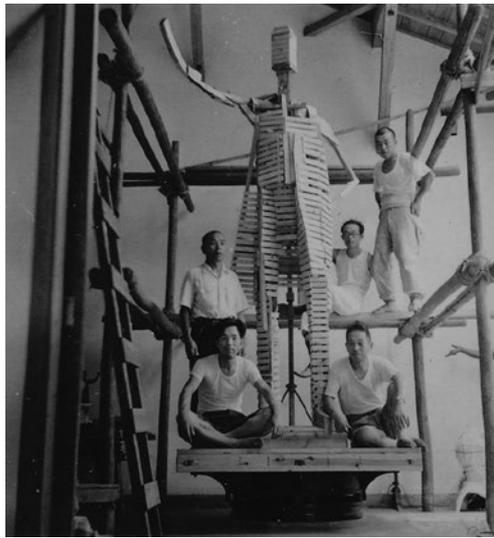


図1 《野口英世像》の心棒
(向かって前列右側に吉田)

本芸術会員を拝命し、昭和三十五年からは、本会の前身にあたる「日本彫塑家倶楽部」の委員長を務めています。先述したように、吉田は多摩美術大学の教授を務めるなど作家活動の傍ら教育者としても尽力し、東京教育大学（現、筑波大学）などでも教鞭を取りました。



粘土原型完成記念写真
(向かって前列右端に吉田)

この作品は実験中の野口を表したもので、左手を腰に当て、右手に掲げた試験管を見つめる姿で立っています。頭部の造形は面の意識が強く、野外に設置する偉人の銅像を多く手掛けた吉田ならではの表現の一端が垣間見えます。

また、昭和三十五年には、玉川学園の関係者たちが、野口を慕うメキシコの医師たちに野口英世像を寄贈する計画を立ち上げました。その際にも吉田が原型制作を担当し、腕を組んで立つ白衣姿の野口英世像を制作。その後、メキシコのメリダ市にあるオーラン病院に設置されま

した（『読売新聞』昭和三十六年二月九日付けを一部参照）。

現代の日本人なら千円札の紙幣を飾る肖像として馴染み深い野口英世ですが、この細菌学者の偉業を伝える一翼を、吉田が造った作品が担っていることは具象彫刻における一つの在りようを示していると言えないでしょうか。

（本稿執筆に際しまして、貴重な資料をご提供頂きました次男であられる故・吉田渉様に謹んでお礼申し上げます）

〈 散歩のご案内 〉

～ 最寄駅 ～

JR・地下鉄銀座線・日比谷線「上野」下車徒歩2分
大江戸線「上野御徒町」下車徒歩5分
京成線「京成上野」下車徒歩1分 駐車場（有料）

◇《みどりのリズム》の

ブロンズクリーニングについて



清水多嘉示《みどりのリズム》
クリーニング前の様子

二〇一七年一月三〇日、前号の「東京彫刻散歩」で紹介しました清水多嘉示作《みどりのリズム》のクリーニングが行われました。上野恩賜公園内上野グリーンサロン前広場に設置されている当像は、一九五一年に上野公園広小路口に設置されて以降一度もクリーニングをされたことがなく、粉塵や樹木の分泌物による汚れが付着した状態で放置されてきました。このような現状を受け、清水多嘉示のご息女（三女）であられる青山敏子氏発案のもと、ブロンズクリーニングが行われました。

ブロンズクリーニングは、武蔵野美術大学彫刻学科の黒川弘毅教授が主導される屋外彫刻の調査保存活動の一環として行われています。黒川先生はこれまでも数多くの清水作品をクリーニングされており、今回のクリーニングでも多くのボランティアの方々にご指導くださいました。

ブロンズクリーニングは以下五つの工程を経ています。

①ブロンズの観察と状態の記録

まず、彫刻を三六〇度様々な角度から撮影します。特に劣化の激しい部分や状態の良い箇所は拡大して写真に残します。

長年メンテナンスのされていない作品には白みがかかった筋がついていることがあります。これは「条痕（じょうこん）」と呼ばれ、空気が彫刻の表面で結露することによって発生します。また、陽の当たる箇所（頭頂・作品の南側等）が特に劣化しやすい傾向にあります。

②洗浄

洗浄液として、水で一〇倍に希釈した「シンプルグリーン」という洗剤を用います。この洗剤は生分解性が一〇〇％のため、環境に与える負荷が非常に少ないことが特徴です。ナイロン



洗浄液をつけたナイロンブラシで
こすり洗いをしている様子

ブラシをこの洗浄液につけて、表面全体を洗います。全体が洗浄できれば、一度水で流し、撥水状態を確認します。



シンプルグリーン

③ワックスの塗布

洗浄した作品をブロワーで乾かした後、ワックスを塗る工程に移ります。まずワックス（蜜蝋）を有機溶剤であるリグロインで希釈し、濃度を調整します。

次いで、希釈したワックスを刷毛で彫刻の表面に染み込ませるように塗布します。全体への塗布が完了したら、バーナーで表面を炙り、ワックスをより染み込ませていきます。



リグロインで希釈した蜜蝋を
塗布する様子

④ 拭き上げ（光沢の調整）

彫刻の量感やフォルムを鑑み、乾いたタオルやブラシで表面を磨きます。この工程では作品の設置場所（陽の当たり方）を考慮し、光沢調整を行います。

⑤ 撥水調査

最後に水をかけて撥水状態を確認し、記録に残します。



拭き上げの様子

・ブロンズクリーニングを経た所感

一、劣化したブロンズにワックスが浸透することによって作品全体の色調に深みが増し、彫刻が生まれ変わったように感じられました。また、クリーニングを通して直接彫刻に触れることができるため、作品に残る清水の手痕（指跡や粘土痕、ヘラ痕等）に気付くことができ、制作の足跡を追体験しているような心地良さを感じることができました。

長時間作品に触れることのできるブロンズクリーニングは、彫刻作品の保存と併せて、楽し

みながら作品に親しむことのできる新たな鑑賞の機会であるようにも思われました。

二、ブロンズは非常に剛性が高く、その特性ゆえに半永久的に形を残すことができます。ですが、屋外に置かれる場合は環境の変化を強く受け、条痕などの劣化は避けられません。ただし今回のような、素材の古び（趣）をも生かせるブロンズクリーニングがあることで、ブロンズ作品は時代とともに生まれ、時代を超えて愛され続けていくと感じました。



作業後の集合写真

前列右から二人目が黒川弘毅教授

前列左から二人目が青山敏子氏

（会員 山本将之）

編集後記

◆北九州と東北地方や各地を襲いました集中豪雨で被災されました方々に謹んでお見舞い申し上げます。一日も早い復興を心よりお祈りいたしております。

◆東京彫刻散歩では上野公園内の吉田三郎作《野口英世像》を取り上げました。ご協力頂きました吉田倫子様、また故、吉田涉様には謹んで感謝申し上げます。

◆ブロンズクリーニングについて、では武蔵野美術大学教授の黒川弘毅先生と学生さん達、青山敏子様、ボランティアで参加頂きました方々に心から感謝申し上げます。またアトリエ訪問、その他、寄稿を頂きました会員の先生方にも紙面をお借りして心から御礼申し上げます。

◆江戸時代の一生分の情報が現代の一年分とか聞いたことがあります。その様に目まぐるしく変化する日々の中ですが、自然に根ざした本物の美とは、また心に響く新しい美とはとじつくりと考えたいと思います。今後とも創作のヒントとなるような情報や企画、ご意見などをお寄せ頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

編集委員 西村 祐一 中原 篤徳 永江 智尚

田丸 稔 一鉄田 徹 三政 洋一

日彫会報 No.76 平成29年8月24日発行